

コメント：徐成伉「中央銀行生成の構造論」*

小幡 道昭†

釋を補完する方策を模索するのが原論の本筋だと思う。

1 結果としての変容論

最初に全体に関わる方法の問題について感想を述べる。「宇野理論の新展開」として「変容論」さらには「多態化」という展開方法が紹介されているが、これは本報告において有効にはたらいっているとは思えない。およそ原論の展開方法は、まず特定の問題に対する理論的な考察が先行して、その帰結として、あとから一連の推論を秩序立て整理するものとして明らかにされるべきものである。

純粋資本主義論にしても変容論にしても、さきに理論的分析をすすめ、それを総括するために考えられたものであろう。これを逆に、たとえば純粋資本主義を説明するため、たとえば周期的景気循環を説かなければならないから金本位制が必要だというように、理論を構成するわけにはゆかない。変容論が先にあって、それをここでの中央銀行論に当て嵌めたらこうなるのではないか、という議論の立て方は本末転倒となる。本報告はさまざまな問題が論じられており、単純のこうだと決めつけることはできないが、さきに「新展開」の紹介から入ったことはマイナスに作用しているように思われる。

とりわけ「変容論」「多態化論」は、さきに前提してしまうと、演繹的な推論の途中で、外部から多様な要因をもちこむことを許し、本来簡単明瞭を旨とする原論を複雑難解にしてしまう。コメンテーターとしては、既存の「変容論」「多態化論」の話はひとまず忘れ（表にださず）、原論の内部的条件から演繹するかたちで中央銀行の問題に迫ることを勧めたい。こうした推論を徹底していったとき、それで説明できない契機が浮かび上がってきたら、その契機の内部を分析し単純化して、そのあとに、純粋な演

2 中央銀行論の特殊性とは何か？

本報告では、銀行信用一般の理論に対する中央銀行論の特殊性が明示されていないように思われる。銀行業資本を導出する論理と、そこから中央銀行（的なもの）を導出する論理を比較すべきではないか。①流動資本だけではなく、固定資本を抱え、流通資本を投下しさらに流通費用をも出する産業資本の間に形成される商業信用から銀行業資本が分化する論理を整理したうえで、これとの比較で、②銀行業資本の間から中央銀行（的なもの）が生じる（同じく分化といってよいか？）論理の特殊性を説明する必要がある。本報告では①が弱く②のみに議論が集中しているのではないか。商業資本もそうだが、機構論における分化（一種の分業論）は、これらが分化しないと社会的再生産が維持できなといった強い必然性があるわけではない。中央銀行的なものの生成は、この分化以上に必然性が弱いと考えられる。このギャップは、商業資本一般の分化と、卸売業資本と小売業の生成との比較でも観察できるであろう。機構論全般に視野を広げ、中央銀行論の特殊性とは何か、考えてみる必要があるのではないか。

3 機能の集中は規模の拡大を伴うのか？

本報告の内容が充分理解できたわけではないが、第2表を中心に考えみる。一番上のレイヤの「発券独占」「準備独占」の対は理解できないのでここでは

* 経済理論学会第72回大会第13分科会：2024年9月14日 15:20-18:00 立教大学

† 東京大学（元）

ふれない。一般的な銀行信用のなかで「水平的組織化」といっているおそらく従来の「銀行間組織」は説明できるという前提のもとで、「銀行間取引兼業→大銀行」と「銀行間取引専業→銀行の銀行」の対を構成するかたちになっている。この「大銀行」という概念が充分説明されていない。おそらく「銀行の銀行」のほうは、規模が問題にはならず、その意味で小銀行でも銀行だけを相手にする特殊な銀行＝中央銀行を指しているのであろう。これに対して規模が大きいということがどういうメリットになるのか、理論的な説明がない。「特に大銀行が高い信用力を有する場合、他行は大銀行を通じた決済や信用の相殺が準備金節約や受信条件の改善に繋がる。」(14頁)という箇所を読むと、「信用力」という無規定な用語を導入して、大銀行→高い信用力という対応を考えているのかもしれないが、どういう理由でそうなるのか、理論的な説明が必要であろう。

『資本論』の蓄積論には、大資本のほうが小資本より利潤率が高く、したがって同じ生産物の価格を相対的に引き下げ小資本を小資本を打倒吸収するという累積的な集中論がある。しかし、規模が大きいほうが有利だという通念は、現代の原論では内的条件からは排除されている。生産技術は規模に関わりなく、利潤率は大資本も小資本も均等になると想定している。生産技術ではないが機構論も同じで、産業資本、商業資本、銀行業資本の間に利潤率に格差があるわけではないし、銀行業資本間に機能上の再分化があっても利潤率に差は生じないと想定してい

るはずである。機能の集中は規模の拡大とは関係ないというのが内的前提であると思うが、ここでの大資本の導入は蓄積論の集中論（機能ではなく規模の集中論）に戻るものなのか？「上位銀行」「下位銀行」という対もでてくるが、これは大銀行と小銀行のような規模とは別なのだとちおう理解するが、用語は重複を避け査証限必要なもの絞り込む必要がある。

4 準備集中とは何を集中するのか？

発券集中と準備集中という対概念も明晰ではない。発券集中のほうは従来から説明で理解できるが、準備集中という概念は立ちいった説明を与える必要があるであろう。「準備」というのは何か、銀行券あるいは預金による支払が一定の範囲でしかできなくなり、その結果、兌換や預金の引出が生じた場合に備える「兌換準備」「支払準備」を指すのか、あるいは銀行の資産をなす債権（割引手形等）の欠損に備える準備（不渡り準備）を指すのか、この点の説明が欠落している。すでに述べたことの繰り返しになるが、中央銀行（的なもの）を理論的に分析しようと思えば、上記のその基礎として、上記①のような銀行信用の分析をまず徹底して勧め、たえずこの基礎のうえに「準備集中」等の上位の概念を組み立てる必要があるように思われる。